

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12899

研究課題名（和文）古典的ハリウッド映画の産業構造と物語様式の因果関係に関する総合的研究

研究課題名（英文）Study of the Causal Relationship between Industrial Structure and Narrative Style in Classic Hollywood Cinema

研究代表者

木原 圭翔（Kihara, Keisho）

早稲田大学・文学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：30755731

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「古典的ハリウッド映画」の物語様式を、「エコノミー（economy）」の観点から調査・分析することを目的としたものである。ここで言う「エコノミー」とは、利益を得るために映画を製作する映画会社の「経済」活動を意味すると同時に、映画作品に見られる「物語叙述、語り」の「効率性」の両方の意味を指している。新型コロナウイルスの影響に伴い海外渡航が制限されたため、研究方法や対象の変更として遅延を余儀なくされたが、種々の言説（スタンリー・カヴェル、パーカー・タイラー、アルフレッド・ヒッチコック）を調査することで、古典的ハリウッド映画のエコノミーに対する多様な解釈の実態を把握することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「古典的ハリウッド映画」は、現在においてもなお、物語の「効率性」が重要な特性であり美德の一つとして考えられている。しかし、本研究を通して明らかになってきたのは、物語における効率性の達成と、製作予算といった経済的な意味での効率性が必ずしも一致しない、両者の複雑な関係性である。とりわけ、観客側の視点から古典的ハリウッド映画を理解するならば、そこには語りの効率性（それに伴う「わかりやすさ」）を逸脱する様々な要因を見いだすことが可能となる。こうした理解は、古典的ハリウッド映画という映画群を一つの固定された様式としてみなす視点を相対化するうえで、重要な貢献を果たしたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate and analyze the narrative style of "classical Hollywood cinema" from the perspective of "economy". The term "economy" here refers to both the economic activities of film companies that produce films for profit, as well as the "efficiency" of the narrative storytelling found in films. Although the restrictions on going abroad due to the effects of the novel coronavirus (COVID-19) forced changes in research methods and subjects, the study of various discourses (Stanley Cavell, Parker Tyler, Alfred Hitchcock) allowed us to grasp the reality of diverse interpretations of the economy of the classical Hollywood cinema.

研究分野：映画研究

キーワード：古典的ハリウッド映画 スタンリー・カヴェル パーカー・タイラー アルフレッド・ヒッチコック

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 1．研究開始当初の背景

1910年代半ばから1960年代にかけて製作された「古典的ハリウッド映画（classical Hollywood cinema）」は、従来から「わかりやすさ」、「簡潔さ」、「効率的な語り」などが、その重要な特性として認知され、学術的にも批評的にも高く評価されてきた。そして、こうした物語上の簡潔さは、予算の効率化といった映画製作における経済性とも密接に関連していることがしばしば指摘されてきた。すなわち、不要な場面や台詞、あるいは過度に派手な演出などといった無駄な要素を極力排除することが、製作費の削減に少なからず貢献しているとする見解である。事実、当時のハリウッドの映画会社は、市場の需要に応えるために一定量の作品を安定して供給し続ける必要があったが、その際に各作品の製作費をいかにして抑えるかは常に重要な課題であった。そのための経済的な種々の工夫が結果として映画の語りをも一層簡潔なものにしたとするような、両者に相互関係を認める一般的な見解は、一見すると極めて妥当なものであるように思われる。

しかし、映画会社側の経営方針と製作現場の製作方針との厳密な関係性については、不明瞭な点が多く、その実態はほとんど解明されていないのが現状である。すなわち、映画会社の事業効率化のための経済政策や経営方針の転換や刷新などは、実際の映画作品が実現している語りの効率性といかなる関係にあり、具体的にどのような因果関係が認められるのか。そして、両者に密接な関係があるのならば、芸術的価値ではなく、利益追求を目的とする映画会社の効率化が、なぜ古典的ハリウッド映画、ひいては映画芸術一般の美徳として評価されるようになっていったのか。単に優れた芸術作品としてではなく、「エコノミー（economy）」という観点から古典的ハリウッド映画を包括的に捉えるということは、「文化産業」である古典的ハリウッド映画を批判的に問い、その根源的な意義を再考することに他ならないのである。

## 2．研究の目的

本研究は「古典的ハリウッド映画」の物語様式を「エコノミー」の観点から調査・分析することを主な目的としている。ここで言う「エコノミー」とは、上述したように利益を得るために映画を製作する映画会社の「経済」活動を意味すると同時に、映画作品に見られる「物語叙述、語り（narration）」の「効率性」の両方の意味を指している。本研究では、作品分析を主とする既存の映画研究が蓄積してきた美学的方法論の中に、産業構造の仕組みを分析する経済学・経営学の視点を新たに導入することで、企業として利益を追求する映画会社の経営戦略と、商品としての映画作品が結果として担う芸術的価値にいかなる因果関係があるのかを明らかにしていくことを目指している。

### 3．研究の方法

新型コロナウイルスの甚大な影響により、当初想定していたアメリカの映画資料アーカイブ（マーガレット・ヘリック図書館）が所蔵する映画産業に関する一次資料の調査が不可能となったため、国内において実施可能な研究内容、すなわち「古典的ハリウッド映画」と呼ばれる映画群を対象にした種々の論者の思想を分析する方針へと変更を行い、研究を遂行した。具体的には、古典的ハリウッド映画の「わかりやすさ」に潜む「曖昧さ」の意味を重視する哲学者スタンリー・カヴェルの映画論、古典的ハリウッド映画を先駆的に論じた映画批評家パーカー・タイラーの精神分析的映画論、そしてアルフレッド・ヒッチコック監督が1940年代半ばに設立した独立製作会社に関する文献調査などを行った。

### 4．研究成果

上述したように、当初予定していた一次資料調査は実施困難となったものの、古典的ハリウッド映画をめぐる多様な言説を分析することで、「エコノミー、効率性」という発想に収まらない、あるいは「効率性」という用語の曖昧さや多様な含意を確認することができ、今後の研究に繋がる新たな知見を複数得ることができた。具体的な研究成果としては、以下の三つにまとめることができる。

#### （1）スタンリー・カヴェルの古典的ハリウッド映画論

カヴェルの映画論の特徴は、古典的ハリウッド映画の効率性を評価しつつも、その過度の簡潔さが必然的に生み出す「曖昧さ」に対して積極的な解釈を行う批評的読解である。特に本研究では、従来過小評価されがちであった、カヴェルの映画論に見られる精神分析の知見の意義を積極的に認め、その独特の活用を「映画観客論」に対する新たなアプローチとして再評価した。

#### （2）パーカー・タイラーの精神分析的映画批評

1940年代に相次いで発表されたパーカー・タイラーの一連の映画論（*The Hollywood Hallucination*, 1944; *Magic and Myth of the Movies*, 1947; *Chaplin: Last of the Clowns*, 1948）は、古典的ハリウッド映画に対する先駆的な論考として名高いが、その内実についてはこれまで十分に検討されてこなかった。とりわけ、精神分析を自在に活用した作品論に対しては当時から批判が根強く、この独創的な批評家に対する後世の関心を大いに妨げてきたと言える。本研究では、タイラーのハリウッド映画論における精神分析の応用を、映画鑑賞体験を一種の「治療空間」とみなす独自の映画観客論として再評価し、その現代的意義を考察した。

#### （3）アルフレッド・ヒッチコックの独立製作会社

タイラーが対象とした1940年代のハリウッド映画は、30年代の均整と50年代の崩壊をつなぐ「過渡期」としてとりわけ重要な時期である。ヒッチコック監督の『ロープ』（*Rope*, 1948）は

長回しを活用した技巧的な映画として高く評価されてきたが、同作はヒッチコックが自ら設立した製作会社「トランスアトランティック・ピクチャーズ」の製作物だという事実が無視できない。本研究では、これまで十分に着目されてこなかった技巧の活用と製作会社の関連を「エコノミー」の観点から検討すべく、同作に関する二次資料を可能な限り網羅的に精査していった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木原 圭翔	4. 巻 109
2. 論文標題 書評 Neil Badmington, Perpetual Movement: Alfred Hitchcock 's Rope, Albany, NY: SUNY Press, 2021	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 128 ~ 132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18917/eizogaku.109.0_128	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木原 圭翔	4. 巻 607
2. 論文標題 夢のウィグワム ジークフリート・クラカウアー『映画の理論 物理的現実の救済』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 7 ~ 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原 圭翔	4. 巻 3562
2. 論文標題 書評 スタンリー・カヴェル『幸福の追求 ハリウッドの再婚喜劇』石原陽一郎訳、法政大学出版局、2022年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 6面
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原圭翔	4. 巻 3499号
2. 論文標題 書評 山本祐輝『ロバート・アルトマンを聴く 映画音響の物語学』せりか書房、2021年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 8面
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 木原圭翔
2．発表標題 映画という治療空間 パーカー・タイラーの映画批評と精神分析
3．学会等名 日本映像学会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 堀潤之・木原圭翔編	4．発行年 2021年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 312
3．書名 映画論の冒険者たち（分担執筆「スタンリー・カヴェル：メディウムを批評する哲学者」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------